

vol.43

転生とは？

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

多重人格とか、交代人格とか、ソウルメイトだとか、イメージナリー・フレンドだとか、いろいろ呼び方はあるが、一つのボディに二つ以上の意識が宿ることはよくある。一人暮らしの部屋に客を招くように、他人の意識を自身の内に迎え容れているのである。実はこの体は自分一人のものではなく、別の誰かから遊離した意識や、異世界から紛れ込んできた意識が宿る。

私たちが「意識」と呼んでいるものは、実は自分が生まれる遙か以前からある。かつて無数の肉体に宿り、乗り換えを重ねてきた意識を、ある日、我が身に引き受けるのだ。生きていくあいだはその意識のユーザーになるが、死後、その意識はまた別の誰かの体に移ることになる。おそらく「転生」とはそういうものである。思春期の頃、急に大人の体になり、意識が体に馴染むまで、かなり違和感を覚えたことを覚えている。それは他者の意識を受け入れた証だったのだ。一方、老化が進み、半分ボケてくると、自分が

誰だかわからなくなったりする。それは意識が使い古した肉体から離れたがっている兆しなのである。自己嫌悪に陥った経験は数えきれないほどあるが、それも実は、いつの間にか自分の中に忍び込んでいた他者の意識との葛藤の現れだったのである。

人は過去の記憶をとどめ、記録に残そうとする。それを回想とか由来とか歴史と呼び、国家や制度、法、人物や土地の存在根拠としている。「この私」が存在しているのも、折々の記憶や他者の意識を脳にとどめているがゆえ。だが、事故やボケなどで脳に異常をきたせば、記憶が失われ、社会的な関係性や属性も断たれ、その人はたちまち地球に落ちてきた宇宙人のように孤立する。記憶が失われると、過去が客観的に実在したと証明することはできなくなってしまう。「この私」はしばしば、両親、友人、他人などあらゆる他者や死者の影響を被っている。いや、人のみならず、動物、植物、微生物、水、土、空気もまたその人の存在を規定している。「この私」はこの肉体に生起するあらゆる現象の結果であり、それら雑多なものに乗せて走る乗合バスにほかならない。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授